

ついに室内砂場を寄贈してきました！



ご支援いただきました全国の皆様、ありがとうございました。おかげさまで、ミナソラの活動のメインであった「室内砂場を郡山の幼稚園に届けよう」という目標をついに達成！5月30日、「子どもがまんなかフェスティバル」というイベントにおいて、初めて郡山の子どもたちの手に触れてもらうことができました。開場して間もなく、室内砂場の部屋は子どもたちでいっぱいになり、たくさんの笑顔を見ることができ、私たちも感激しました。(来場者 5500 名)



ちなみに、室内砂場第一号の参加者は、幼稚園以外では外遊びを制限しているという親子でした。「本当に楽しみにしていた」とおっしゃってください、大変嬉しかったです。ふだん外遊びをしている子も、そうでない子も、やはり砂遊びは大好きな様子でした。しかし、あるママの話によると、「震災後は公園で砂場そのものの存在を見なくなり、子ども自身も砂場で遊ぶことが無いように思う」というような話をされています。また、「子どもの成長にとっては必要なものだから、このような砂場はとてありがたい」という声も聞こえてきました。

<その他、現地のお母さん達や先生方からの声>

- ・3日間のうち外遊びは30分のみ。(幼稚園) ・洗濯物は毎日室内干ししている。
- ・幼稚園では週1回、外遊びをした合計時間をメールで通知。
- ・部屋の壁側に水入りペットボトルを置き、少しでも線量を遮断している(効果あり)。
- ・何をするにも以前は使わなかった労力が必要とされる。
- ・県外産の給食を取り入れている(幼稚園)。
- ・子どもは外遊びをしたがる(が母は放射能が不安)。等



満員御礼！



郡山市長(左)と郡山市私立幼稚園協会会長 平栗先生(右)

◎「福島で生きていくと決めた以上、生活(放射能から身を守る)に気をつけながらも周りとの関係も見ながら生活しないといけない。」そんな、日々葛藤の中生活しているママ達の希望になれば…。長期にわたって向き合っていないといけない問題なので、幼稚園の保養によって少しでも力になれば、と思います。同じ子どもを持つ立場で、我が子を守りたいという気持ちが分かるからこそ、この問題に寄り添っていきたいと感じました。(U)



測定中！

現地で放射能をチェック！

今回、線量を測る機械で実際に歩道の放射線量を測定しました。水が流れるところは今も線量が高く(数値は震災後に国が引き上げた年間被ばく量以内です。

震災前：年間1ミリシーベルト⇒震災後：年間20ミリシーベルト)、測っている行為自体も現地の方にとってはものめずらしいようです。

「えーっ!?!」



◎小学校5年生の子どもをもつお母さんが、林間学校で除染もしていない山に一泊で子どもが行くことに胸を痛めていました。お友達と行きたいと思う我が子の気持ちと、なぜ除染もしていない山で2日間も我が子を過ごさせればいけないのか?という葛藤。せめて飲料水だけでもということで水を支援している団体や学校に掛け合い、全学年分の水を支援してもらえるようお願いし、やっとOKが出たので支援の水を学校に届けるそうです。

様々なことに対し、今までいらなかったエネルギーと判断が必要で本当に現地のお母さんが我が子を少しでも守りたいという気持ちに胸が痛くなりました。しかし、質問していると最初は「もうあまり気にしていません」という言葉が以前に比べて増えたように思いました。(もういいやと目にも見えないし、専門家も大丈夫と言ってるし、食材も測ってるし…皆気にしてないし…)そんな空気も感じました。しかし話を進めると実は心の中では心配している。しかしもう気にしてられない生活だから。私たちがこの様な状況で再稼働?オリンピック?と皆さん口を揃えておっしゃっていました。子孫に将来どうして先祖はこの地を離れてくれなかったんだろうと言われるかもしれないと思う・・・等々気にしてないかと最初はいつでも話を進める中でぼろぼろと本音が・・・。(京都のお母さんたちが福島のことをこんなに考えてくれているのに私たちは情けない・・・とか放射線のことを知らないから気にしてないだけなのかな?と言われてたり...)年配の方も孫たちの将来が心配だとおっしゃっていました。

毎日のこととなると、子どもの小学校も車で送り迎え。道路に線量が高いホットスポットがあるから。給食もやめてお弁当。一つひとつの行事も、全て悩みながら判断をしなければならない。

頑張っているママ達は保養の必要性も強く感じており、まこと幼稚園が行っている留学も、本当にこれからの福島応援の在り方として大事なことなんだと再確認出来ました。この幼稚園留学を全力でサポートしていくことが、福島の子どもの希望となり京都でも同じように受け入れてくれる幼稚園が増えることを願います。

原発以外にも社会には多くの問題があります。しかし全てどこかでつながっている様な・・・一人ひとりが諦めずに個々に出来ることをやり続けることこそ、子ども達の未来に必要なことと信じて頑張りたいと思います。(H)

頑張っている現地のママ達と交流！



まこと幼稚園は今年もやります！保養プロジェクト

～今年の秋に予定～

去年に引き続き、今年も郡山の私立幼稚園に通っている年長さんとその母親を対象に、3週間京都に来て心身ともにリフレッシュしてもらう企画を考案中です。その背景には、将来、身体にどのような影響が出てくるか分からないという不安とともに、「まだ気にしているの?」「神経質だね。」と言われるなど、表立って放射線を気にしていると言えない環境もあります。



どんぐり拾いイベント(2014年秋)

◎「今は震災前とほとんど変わらない生活を送っています」と言っていた方が多かったが、実際は意識的に「放射能汚染」に関することを気にしないようにしているのではないかと感じました。あるママは、「気にしてたらやってられないですよ」とも言っていました。恐らく、そう考えている人達が主流だろうと推測します。でも、本音のところでは自分の子どもの未来に対し、大きな不安をたくさん抱えている様子が伺えました。今は何もなくても、将来どうなるか(身体上にどのような影響が出てくるかはわからない)と苦悩している姿も垣間見えました。大なり小なり差はあるにしても、いつも心の底でママたちは悩んだ

京都新聞
2015年(平成27年)
3月11日(木)

福島の子 砂遊びしてね

東日本
大震災
4年

向日市の母親らでつくる福島支援グループ「ミナソラノシタ(ミナソラ)」が、福島県の子どもに砂遊びを安心して楽しんでもらおうと、郡山市の幼稚園にホワイトサンドを贈った。オリジナル製品を販売した収益や寄付金で購入し、寄贈した砂は現地の幼稚園が設ける室内砂場で活用される。東日本大震災からきょうで4年。メンバーは「全国の人の思いがもった砂を届けることができた。今後はメンタル面の支援もしていきたい」と話す。

向日の母親団体「ミナソラ」室内用8ト贈る

ミナソラは、向日市鶏冠井町のまこと幼稚園に通う園児の保護者を中心として昨年夏に発足した。被災地では原発事故による放射能汚染の恐れから外遊び時間が制限されていることを知り、幼稚園に室内砂場を贈るために活動を進めてきた。イラストレーター黒田征太郎さん、かばんメーカーの一澤信三郎帆布(京都市東山区)、障害者作業所のリンデン(北区)が協力し、独自の手提げかばんとトートバッグを贈る。昨年12月末までにオリジナルのシナール製品と基金を合わせて約52万3800円が集まり、まこと幼稚園で使っているのと同じオー

独自かばんの収益で



ミナソラノシタが福島県の幼稚園に贈ったのと同じホワイトサンド。子どもたちに思いっきり砂遊びを楽しんでほしいという願いがこもる。(向日市鶏冠井町まこと幼稚園)

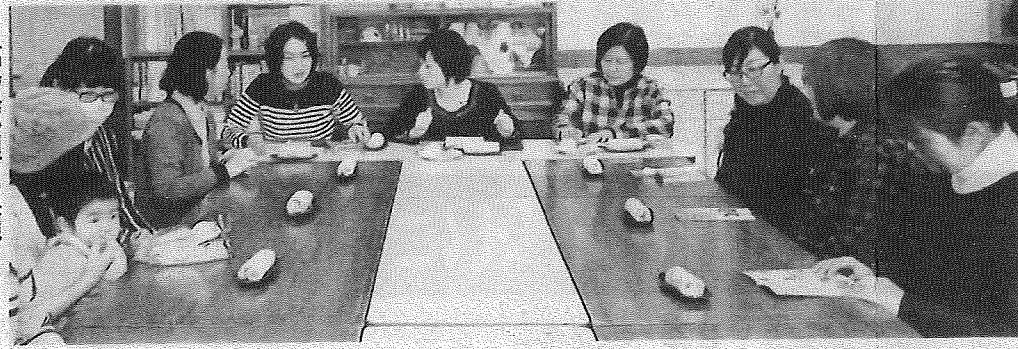


被災者支援のために制作、販売しているオリジナルかばん。黒田征太郎さんのイラストをプリントしている

ストラリア産のホワイトサンド8トを購入した。ミナソラ代表の林リエさんらメンバー5人が今月3〜5日に郡山市を訪れ、同市私立幼稚園協会の平栗裕治会長に目録を手渡した。

「避難していないからといって、放射能を気にしていない訳ではない」。そんな一言に、普通に暮らしているように見えても揺れ動いている母親の胸の内を感じた。

避難をしなかった人、あきらめた人、原発近くの浪江町から避難してきた人、原発事故に伴う賠償金をもらった人、もらえなかった人…。同じ郡山市に生



福島県郡山市の母親たちと懇談するミナソラノシタのメンバー

被災地を訪問 心の支援 必要性実感

母親たちは子どもの健康や将来を心配していた。幼稚園は比較的規模が小さく、親の気持ちや意見に配慮してくれる。でも、小学校に入ったら組織が大きくなり、我が子を守れなくなってしまうのではという不安が募る。放射能の人体への影響や娘の将来に心を痛める声もあった。接する中で感じたのは、人と人のつながりによる精神的なサポートの重要性だった。まこと幼稚園と向日町教会が取り組んでいる幼稚園教諭の京都招待や親子の保養留学には今後、より力を入れて参画したいと思う。細くても長く活動を続けていくことが被災者の支えとならないか。福島の問題を共に考え、寄り添う仲間が増えてほしいと強く願う。(大西保彦)

採用してもらえないよう呼び掛けていく。林さんは「砂場が実現しなかったらどうしよう」と不安になったこともあったけど、砂を贈ることができてホッとした。今後は子どもや保護者、幼稚園の先生らのメンタルサポートに力を入れた」と話している。(大西保彦)

福島の実況伝えたい

「ミナソラ」は、向日市鶏冠井町のまこと幼稚園に通う園児の保護者を中心とした活動をしている。原発事故による放射能汚染の恐れから外遊びを十分にできない子どもたちのため、オリジナル製品を販売。収益や寄付金で室内砂場用のホワイトサンドを購入し、郡山市私立幼稚園協会に贈った。

同市を訪れたのは「ミナソラ」代表の林リエさん(37)、同市出身の上田名菜子さん(29)、茨城県出身の森岡恵美さん(38)。5月末にあった「こどもがまんなかフェスティバル」に参加した。

室内砂場はフェスティバル会場の一角に設けられた。子どもたちは大はしゃぎしながら砂で団子や山を作ったり、スコップで砂をすくったりして遊んだ。最初に砂場にきたのは自宅を外遊び時間を制限している親子で、「本当に楽しみにしていた」と語ったという。ただ、原発事故の発生以来、被災地では砂遊びが制限されてきたためか、砂場での遊び方を知らず、幼稚園の先生に教わりながら遊ぶ子どもたちの姿も見られたとい

砂場寄贈した郡山へ訪問



郡山市訪問の様子を振り返る「ミナソラ」のメンバー(向日市鶏冠井町・まこと幼稚園)

を端々に感じた」とい、「京都では原発事故は遠い所の出来事と思われているが、福井にも原発があり、被災地の状況を知れば知るほど人ごとではない。福島に住んでいる人たちの現状を伝えたいと何も変わらない」と話す。

また、現地の母親からは「保養」の必要性を訴える声もあつたという。ミナソラは、まこと幼稚園と向日町教会が昨年創設し、福島の園児や保護者を数週間受け入れる「幼稚園留学」のサポートも続けていく。林さん、上田さん、森岡さんは「子どもを持つ同じ立場で、我が子を守りたいというお母さんたちの気持ちに分かるからこそ寄り添っていききたい。保養する親子を受け入れる取り組みが各地で広がれば」と願う。

向日の母親団体「ミナソラ」

向日市の母親らでつくる福島支援グループ「ミナソラ」が、このほど、福島県郡山市を訪れた。同市の幼稚園に贈った室内砂場で遊ぶ子どもたちの姿を見て活動の成果に喜ぶ一方、現地の母親や幼稚園の先生の話も聞いて胸の内を知る中で、継続的な支援と福島への「いま」を伝えることの大切さを感じたという。(大西保彦)

一方、母親や幼稚園の先生からは「3日間のうち外遊びは30分」「洗濯物は毎日室内干し」「放射能が不安だが、子どもは週一回、外遊びの合計時間を

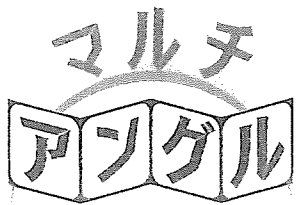
継続支援が大切

「保養」も必要



ミナソラが寄贈した室内砂場で遊ぶ子どもたち(5月30日、福島県郡山市「ミナソラ」提供)

メールで通知している」といった声が寄せられた。そういつた深刻な声を聞き、林さん、上田さん、森岡さんは「子どもの健康や未来に対してお母さんたちが抱いている不安



砂遊びを楽しむ子どもたち

砂遊びなどに夢中

郡山市私立幼稚園協会フェス 笑顔広がる

郡山市私立幼稚園協会「こどもがまんなかフェスティバル」は五月三十日、郡山市の郡山カルチャーパークで開かれた。五千人以上が来場し、多彩な催しに笑顔と元気いっぱいだった。

福島民報社などの後援。東京電力福島第一

原発事故の影響を気にせず、思い切り体を動かしてもらおうと昨年度に引き続き開催した。

会場には、京都のNPO団体「ミナソラ」の協力で屋内砂場が登場した。子どもたちは砂の山を作ったりして楽しそうだった。

ミニSLのコーナーも人気を集めた。子どもたちは、父母らに笑顔で手を振りながら、乗車していた。

親子運動遊び、ダンス

ポール迷路、工作、人気キャラクター「ポケモン」のスペシャルステージなどが多彩に繰り広げられ、にぎわった。

開会式では、平栗裕治会長、品川萬里(まさこ)市長があいさつした。一番乗りのお母さんらと交流関係者がテープカットした。

京都新聞
2014年(平成26年)
11月20日(木)

向日の幼稚園など被災者支援

福島から「親子留学」創設

向日市鶏冠井町のみこと幼稚園と向日町教会は、放射能の影響に苦悩している福島県の子どもや保護者を支援するため、園児を同幼稚園に短期間受け入れる独自の「留学」制度を創設した。10月21日〜今月10日までの3週間、同県郡山市の子ども5人と母親2人が向日市に滞在し、同園で生活を送ったほか、京都観光やドンクリ拾いなどを楽しんだ。(大西保彦)

今秋は思う存分外遊び

まこと幼稚園や向日町幼稚園長らを招いた講義や交流会など、東日本大震災と福島第一原発事故で多大な被害が出た福島を、見つめ続けていくこと、絵本を贈ったり、現地の



「留学」制度を利用し、まこと幼稚園に通う福島県郡山市の園児や母親(向日市鶏冠井町)

同幼稚園の園児たちと仲良く遊んだ。また休日には福島支援に取り組んでいる母親らの協力で、京都市の嵐山を観光したり、着物を着て向日神社(向日市向日町)を訪れたりした。市民宅に夕食を招かれ、食卓を囲んで交流も深めた。

理恵子さんは「当たり前前のことが当たり前にできることがどれほど幸せかを感じた。福島ではだしにないけれど、京都に来てはだしで懸命に走る娘の姿を見ることができて良かった」と話した。

まこと幼稚園と同教会は今後も「留学」受け入れを行っていく予定。ただ、今回は宿泊場所を一家を生活費はすべて同幼稚園と同教会が拠出した。



支援者に着物を着せてもらい、向日神社で記念写真を撮る郡山市の親子(向日市向日町)

福島県の母親は今、何を考え、何に気を配りながら暮らしているのか。向日市のまこと幼稚園と向日町教会による「留学」制度を、長女、長男と利用した同県郡山市の岡部理恵子さんに聞いた。

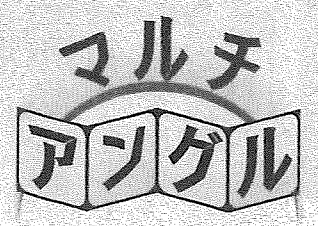
母親に聞く

「福島第一原発事故に伴う放射能汚染の恐れは？」
「事故直後よりは良くなったと思うが、放射線量が落ち着いている訳ではない。事故後、食べ物や水に気をつけるようになり、空気清浄機を購入した。外に出なくていいなら出ないようになっている」
「被災地の母親の様子は？」

「下の子が産まれて1カ月後に大震災が起き、新潟に約2年半避難した。今年4月に郡山市に戻ったが、原発事故や放射能のことを気にしている人がいなくさず、さるくらいだと感じた。事故のことを言える雰囲気では

産地気にせず買い物／洗濯物を外に干す 「当たり前」の日常に幸せ

「良い保養になればと思いき手を挙げた。福島では精神的に切り詰めて生活している感じがある。自分が染まると、子どもが被ばくすると思うことがある。嵐山でトロッコ列車に乗ったり、着物を着せてもらった。私もちももリフレッシュでき、いい思い出になった」
「福島では洗濯物を室内に干している。卵や肉、野菜などは産地を気にかけ、店を変えて買っている。京都では一つのスーパーで欲しい物すべてを買え、雨で洗濯物を干す心配するようになった。当たり前前の日常を当たり前に過ごせる幸せを感じた」
「鹿児島県知事が九州電力川内原発の1、2号機の再稼働に同意した。なぜ分らないのか、という思い。福島で多くの人々が苦しんでいるのに、再稼働するなんてよく言える、という気持ちです」



東日本大震災から4年半に合わせて被災地の現状について学ぶ講演会「世界と福島と私たち…」が11日、向日市鶏冠井町のまこと幼稚園で開かれた。福島県私立幼稚園連合会会長の平栗裕治さんが、各園で健康被害を懸念し外遊びを制限している現状を説明した上で「子どもたちの体力は低下している。健やかに育つ遊びを提供するとともに、除染を最優先に進めてほしい」と訴えた。

向日で福島の実況学ぶ講演会

子らに健全育成の場を

支援団体 「一人一人が
見て考えて」

もたちが外遊びをしなくなり、園庭で転びやすくなったことを指摘し、「砂場やブランコを経験したことがなく、どう遊んでいいかわからない園児もいる。自由に遊ばせてあげられないことが本心に悔しい」と唇をかんだ。

意を述べた。これに先立ち、東日本大震災国際会議委員長を務める岡本知之さんが講演。政府の原発再稼働や「シヨック・ドクトリン」と呼ばれる惨事に便乗した急激な市場原理主義の推進は、世界から多くの批判を受けてい

向日市の母親らでつくる福島支援グループ「ミナソラソラソラ」(ミナソラ)が企画し、約100人が参加した。福島県郡山市で幼稚園長も務める平栗さんは、福島第1原発事故の影響で子どもたちが健全に育つことができないよう、取り組みを一步一歩進めたい」と決

平衡感覚を身に付けさせるために遊びを工夫したり、園庭を地元の子どもに開放するなどの取り組みも紹介。「全県が除染され、子どもたちが健全に育つことができないよう、取り組みを一步一歩進めたい」と決

るとし、「政治活動ではなく、生命倫理を背景にした市民活動が必要だ」と持論を述べた。最後に、ミナソラのメン

バーが活動の経緯や内容を紹介。活動への思いを涙を流しながら語る福島県出身のメンバーもいた。林リエ代表は「原発イエスか、ノーの会ではない。(活動を通じて)一人一人が社会に目を向け、自分で考える一助になれば」と話した。(小野俊介)



「外遊びが制限され、子どもの体力低下を懸念している」と話す平栗さん(向日市鶏冠井町・まこと幼稚園)



福島支援活動への思いを語るミナソラのメンバー

京都

味ひとすじ むかし
むし

新築極上・でんわ 221-2412

15歳以上に掲載

15歳以上
高温率以上
掲載以上
掲載以上

向日のボランティア団体

ママの力で福島応援

中学生と連携 グッズ販売し寄付

東京電力福島第一原発事故の被害に苦しむ福島県を応援しようと、向日市の母親たちが中心となったボランティア団体が活動の幅を広げている。設立は2013年7月。オリジナルグッズを製作し、収益の一部を福島県山形の幼稚園に寄付し、遊戯用の砂を寄付したり、京都市の中学生との連携も始めた。賛同者は徐々に増え、向日市だけでなく福島から府内に避難している人など、今では市内外の16人の母親が参加する。東日本大震災から4年半となる今月11日には、福島から講師を招き講演会も企画している。

【野口由紀】

活動報告もする。



桂中の生徒らとオリジナルグッズのデザインを検討する「ミンナソラノシタ」のメンバー＝西京区の桂中で

東日本大震災

向日市の「まこと幼稚園」に子供を通わせ、発事故や被災地への特別な思いが、別高い関心があった。心となり、有森の始め「ミンナソラノシタ」13年夏、まこと幼稚園が福島県山形市に招待した際、世話人として関わったことが

活動の柱の一つは、

売上げの一部が寄付金になるオリジナルグッズの製作・販売。また、大震災を風化させないよう、講演会も開いてきた。今月11日には福島県立幼稚園連合会会長の平栗裕治さんを招き、「福島の子供の現状」をテーマに話してもらう。当日はミンナソラノシタの

あす講演会

11日の講演会は午前10時～正午。まこと幼稚園(向日市鶴舞井町山畑25)の礼拝堂。参加費無料。問い合わせはミンナソラノシタ事務局(080・2540・3224)。

「現状知って一緒に活動」

震災体験、生徒に伝える

向日の母親・被災者支援グループ

桂中で授業 生徒ら聞き入る

向日市の母親や東日 思いを巡らせた。本大震災の被災者らで つくる福島支援グループ「ミナソラ」が7日、に役立てるミナソラに 京都市西京区の桂中で 講演を申し入れた。文 被災体験やグループの 活動を紹介する出前授 業をした。生徒らは真 剣な表情で、生の被災 者の声を聞き、震災に 思いを巡らせた。同中の教員が、独自 製品を販売して福島の 幼稚園や子どもの支援 聞いた。初めて被災体験を語 った福島県郡山市出身 の上田名菜子さん(29) 西京区IIは、東京電 力福島第一原発事故に よる放射能の影響で出 産できなくなるかもし れないという不安があ ったことや、家族を残 して京都に来たことか ら「一人だけ避難して きた」という後ろめた い気持ちが続いた経験 などを話した。



ミナソラによる被災体験や活動の紹介を真剣に聞く生徒たち
(京都市西京区・桂中)

生徒会長の園田一馬君(15)は「中学生でも、被災地を忘れないで思いを届けることはできる。将来大人になっても、震災を子どもたちに伝えたい」と話した。(加藤華江)

福島の子供たちのために…

外遊び制限 各園、取り組みに工夫

東日本大震災から4年半を迎えた11日、京都の母親たちでつくるボランティア団体「ミンナソラノシタ」（林リエ代表）が子供たちの現状や未来を考える講演会を向日市で開いた。講師となった福島県私立幼稚園連合会の平栗裕治会長（67）は、外遊びの制限により園児の体力が低下し、主体性も育ちにくいことなどを報告した一写真。市内外から

参加した105人は世界、福島、京都という三つの視点からの発言に聴き入り、被災地に思いを巡らせた。

平栗会長は講演で、室内遊びの工夫や親子の心のケアなどの各園での取り組みも紹介し、「震災を機に生活は一変した。未来を託す子供たちのために一歩ずつ進んでいきたい」と決意を込めた。

最初に登壇した兵庫県西

東日本大震災

未来考える講演会 向日市

宮市の西宮教会こひつじ幼稚園の岡本知之園長（62）は、大震災に関するキリスト教の国際会議で委員長を務めた経験から「世界から見た日本」をテーマに話した。ドイツ政府が東京電力福島第1原発事故を受けて脱原発にかじを切ったことを踏まえ、国内の原発再稼働への動きに「世界からは理性的な判断だとは見られていない」と指摘した。

最後にミンナソラノシタのメンバーが活動を紹介し、福島県郡山市出身の上田名菜子さん（29）＝京都市西京区＝が「関心を寄せていただき、とてもうれしい。皆様の思いが復興につながると思う」と声を詰まらせながら話すと、会場から温かい拍手が送られた。

【野口由紀】



市民版



各宗新墓所御紹介
(有)北尾

本店 京・左
TEL 075-805-0055
FAX 075-805-0055
八瀬店

「遠い京都」と、福島市出身の石崎綾子さん(35)は言った。京都の中学生が関心を持ってくれたのがうれしくて、東日本大震災後の避難経験を初めて話すのだ、と。別な距離の意味だったのだから。しかし、気持ちも離れていく気がしてならなかった。

遠い京都で

生が放射能の説明をできなくても仕方がない。

向日市の母親らでつくる福島支援グループ「ミンナソラ

べんがら格子のむこうから

ミンナソラは独自製品を販売した収益で、放射能汚染の恐れから自由に遊べない子どもたちを支援する活動を、2013年からしているが、学校で講演するのは初めてだった。

(加藤華江)

京都新聞
2014年(平成26年)
4月26日(土)

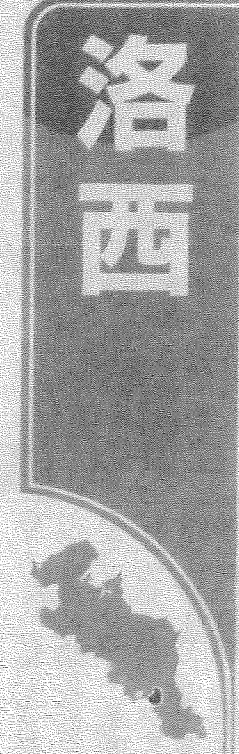
向日の母親ら福島の子ども支援



レシ近くに「ミナソラ」シタの手提げかばんを飾り、来店客に見てもらっているマルヤス(向日市向日町)

向日市の母親らでつくる福島支援グループ「ミナソラ」シタ(ミナソラ)の取り組みに賛同し、応援する動きが徐々に広がっている。グループの製品を店舗に置いたり、チャリティーイベント収益の一部をグループに寄付する計画を立てたりして、福島の子どものため活動を続けるお母さんたちを後押ししている。

「ミナソラ」賛同の輪広がる



写真はかけがえない記録。そして言葉のいらぬメッセージです。
http://yasuicamera.com
ヤスイカメラ
長岡京市今里 2 (099)4450

洛西総局
〒617-0006
向日市上植野町 上川原7-1
代表 075(933)1121
FAX 075(933)1122
本社報道部
☎ 075(241)6119
FAX 075(252)5454

119番
乙訓消防組合本部まで
24日午後4時~25日午後時
【向日】
火災 なし(2件)
救急 4件(65件)
救火 8件(89件)
救急 5件(34件)

店にかばん置き販売協力



「ミナソラ」シタのかばんや絵はがきとともに原発事故などをテーマにした本も置いているワンダーランド(向日市寺戸町)



チャリティーキッズカット 美容室、収益の一部を寄付

「チャリティーキッズカット DAY」の収益の一部をミナソラに寄せるkaguy ahime(長岡京市長岡2丁目)

向日市向日町の向陽小隣にある学用品店「マルヤス」は2月から「ミナソラ」の手提げかばんを置いている。社長の鈴木大三さん(59)は同市鶏冠井町のまこと幼稚園の卒園生。同幼稚園や向日町教会、ミナソラによる福島の幼稚園と子ども支援に関心を抱いて

向日市寺戸町のJR向日町駅前の絵本・児童書専門店「ワンダーランド」も手提げかばんの販売協力をしている。店主の長谷川みゆきさん(57)によると、かばんを市外から買い求めに来る人や、「孫のために」と購入する女性もいるという。長谷川さんの長男と次男はまこと幼稚園の卒園生。「普通の若いお母さんたちが、きつと悩みながらも、一歩ずつ進んでいる。取り組みが広がっていいなと思う」と後輩ママに温かい視線を送る。かばん近くには福島から避難した子どもを題材にした絵本や原発事故を扱った本なども置き、来店客の関心を呼んでいる。(大西保彦)

「苦んでいる子どもを支援する取り組みに何らかの形で協力したかった」と話す。

一方、長岡京市長岡2丁目の美容室「kaguy ahime」は、5月6日のイベント「チャリティーキッズカット DAY」の収益の一部を、ミナソラに寄付する。これまで日本赤十字社などに義援金を寄付してきたが、今年からミナソラ応援のために収益を活用することにした。オーナーの田中志保さん(37)は「目標が明確で、協力したいと思った。子どもに切ることの楽しさも知ってほしい」。

「ミナソラ」シタ 原発事故の影響で外遊びの時間が制限されている福島の幼稚園や子どもの支援に取り組み。手提げかばんやトートバッグなどを販売し、収益で福島の幼稚園に室内砂場を造る計画

を進めている。イラストレーターの黒田征太郎さん、かばんメーカーの一澤信三郎帆布、障害者リネンがかばんやバッグの製作に協力している。連絡は事務局 minasora.k.yoto@gmail.com